

人文・社会系



東アジア海域交流史を学際的に展開し、 日本の伝統文化形成との関わりを解明

東京大学大学院人文社会系研究科教授 小島 毅

【研究の背景】

日本と中国大陸との交流の歴史において、寧波(ニンポー、Ningbo)という港町はきわめて重要な位置を占めています。西暦9世紀(遣唐使時代の末期)以降、17世紀のいわゆる鎖国にいたるまで、両国を往来する船舶の多くがこの港を利用し、ハブ港としての役割を担っていました。

日本は古来、中国大陸・朝鮮半島と密接につながっていました。例えば、右の地図(図1)を見てみましょう。南北を逆さにしただけでも、日本列島や東シナ海・日本海のイメージが変わります。このほうが東アジア海域を往来していた人たちの見方に近いのではないのでしょうか。

寧波に焦点をあわせ、従来、個別専門分野ごとに進められてきた東アジア海域交流の歴史を学際的に検討する場を設けて究明するのが、この研究の目的です。それによって、一国史観からは見えてこなかった日本伝統文化形成の実像を明らかにすることを志しています。「寧波プロジェクト」、略して「にんぷろ」がこの共同研究の愛称です。

【研究の成果】

私たちの共同研究には、国内外の研究協力者を含め、約200名の研究者が参加しています。過去4年間に行われた個別の研究発表や学術論文の数は数百件に及び、発表成果も既にいくつか公開されています。

わかりやすい研究成果の例としては、13世紀の東大寺再建に際し寧波から石材切り出し技術が移入されていたこと、日本の禅寺で祭られている神様に寧波で尊崇を集めていた「招宝七郎」という神がいること、江戸時代に流行した俗謡「かんかんのう」の起源が中国の古典音楽である「九環連」であることなどが明らかになりました。

これらの結果、正式な外交関係のなかった中世の日中間にも緊密な交流があり、それが日本の伝統文化形成に深く作用したことが確認されました。

各種公開研究会の情報は、私たちのホームページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/>)にアクセスして見ることができます。

【今後の展望】

「にんぷろ」により、学問分野ごとではない共通の研究の場が構築された経験を活かし、将来は、隣接諸分野を含んだ広い視野に立つ研究成果が蓄積されていくでしょう。それにより、東アジアの交流史や日本の歴史について、根本的な書き直しがなされていくかもしれません。

最終年度である平成21年度においては、博物館などの場を借りて、一般社会に向けた研究成果の還元にも努めていきたいと考えています。



図1 南を上にしてみた東アジア海域図(網野善彦『「日本」とは何か』等にも指摘があるように、日本海や東シナ海が内海に見える)



図2 宋氏一族(12～13世紀に政府高官を輩出した寧波の名族)の墓道にある石像(これらの石材加工技術が鎌倉時代に日本に導入された)



図3 寧波郊外、宋氏墓群石像の現地調査光景

交付した科研費

平成17～21年度 特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」